

社団法人私立大学情報教育協会  
第2回 CCC 国際関係学グループ運営委員会議事概要

- I. 日 時： 平成21年7月25日（月）午後2時～4時  
II. 場 所： 社団法人私立大学情報教育協会事務局会議室  
III. 出席者： 多賀委員、林委員、大崎委員  
事務局： 井端事務局長、森下主幹、山野上

IV. 検討事項：

0. 本日の議事進行：多賀委員、記録担当： 大崎委員

1. 学士力の詳細設計について

国際関係学における学士力の詳細について、基本的な考え方とその内容について、以下のように意見交換を行った。

(1) 基本的な考え方

- ・ 「国際社会は主権国家からなるものだ」とする従来の考え方はもはや金科玉条ではない。主権国、家間関係の変遷を、植民地主義や第一次世界大戦以来の総力戦、国際機構の成立、そして国際赤十字等を嚆矢とする行為体・アクターの多様化という流れの中でとらえなくてはならない。NGO や多国籍企業も第一次世界大戦時の生成期からほぼ 100 年を経たクロッシングポイントにさしかかりつつある。
- ・ 学士力の項目 1 (基本知識)・ 2 (スキル)・ 3 (態度) を具体的に肉付けしていく過程で、国家間関係的な発想だけではなく、主権国家システムの分散、グローバリゼーションの進展ということを前提にグローバル世界を視野に入れた「グローバル・ヒストリー」的なものを西洋近代主義的なメイン・ストリームの中に取り入れていくことも必要だ。
- ・ 安全保障＝security を一方的にリアリストのものだと考えるのは古い。新定説である「理想＝平和と現実＝力 の総合としてのセキュリティ」という概念でとらえなくてはならない。
- ・ 多文化主義＝multiculturalism を基盤としながら、アイデンティティが形成された時間・空間を検証し、自己肯定と他者肯定を基本としなくてはならない。西洋の近代化も多層多重である。

(2) 設計にあたって

- ・ 「スキル」とは、知識から派生し何かを引き出す能力なのか、あるいは知識とは独立した別の範疇のものなのか整理する必要がある。
- ・ 「スキル」には、異文化接触の実践のような実践的なカリキュラムを入れることもあっていいのではないか。例えば、留学生も交えたコミュニケーションやワークショップの開催などもある。
- ・ 国際関係学の分野においては、「コミュニケーション能力」をプラスアルファで考え、今までにない発想で分解してみたい。例えば、「辞書を持って文献を読む」という発想を根底からひっくり返すような、逆に後で文献を読んで確認するというような発想である。
- ・ 前回配布資料⑧. 1 の QAA (The Quality Assurance Agency for Higher Education) の Politics and international relations 2007 は、「学会回顧と展望」という印象で総花的でつかみどころがない。

以上の議論を踏まえ、学士力の詳細内容について、現時点で次の到達目標と到達度を決定した。

(基本知識)

1. 現代の国家、地域、国際組織などで構成する国際関係の基礎的な仕組みとその背景を理解できる。
  - ・ 主権国家体系の成立と変遷にかかわる知識を理解できる。
  - ・ 人、物、金、情報の国境を越えた増加により、グローバル化が加速していることを理解できる。
  - ・ 国民国家社会からグローバル社会へ、近代工業革命後から近代情報革命後社会に対応ができる。(多重、多層の世界を縦横に行動することができる)

(スキル)

2. 国際的な課題等について、国家、地域、国際社会の観点から調査・考察し、多角的・複合的な分析ができる。
  - ・ 文化、宗教、言語、政体が多様であることを理解できる。
  - ・ 現実主義から理想主義までの多様な理論に基づいて国際関係を説明することができる。
  - ・ 母語以外の複数の言語の習得ができる。
  - ・ 調査、考察、分析能力を有する。

(態度)

3. 国際社会と国家、地域、個人との関係を認識し、国境を越えて協力し、支え合う態度を身につけることができる。
  - ・ 異文化接触の実践ができる。
  - ・ アイデンティティの確立と自己肯定、他者肯定ができる。
  - ・ 協生の理解と環境・貧困などの地球的問題に対して協力して対処する行動力を身につけることができる。
  - ・ 産業革命が生み出した構造的貧困を理解し、その解決法について、公正、人権に照らして模索、提案することができる。
  - ・ 社会正義、社会的公正、人権、生存権、環境と貧困、飢餓、疾病、自然災害、難民、戦争、暴力の問題に取り組もうとする意識を持つ。

※注 実際には単語の列挙にとどまった部分もあったが、意図を汲み取り、事務局で文章形式に補整している。

2. コア・カリキュラムのイメージについて

- ・ 具体的なコア・カリキュラム作りにあたっては、大学院のコア・カリキュラムを学部以降に降ろすということも一案ではないか。シラバスも他の大学院の事例を調べてみる必要がある。

3. 今後の検討スケジュール

- ・ 「学士力」の詳細について8月末までにメーリング・リストで議論を重ねることとなった。
- ・ コア・カリキュラムについては、次回委員会に持参する。シラバスのスケルトンとして考えてもよい。